

## 中流住宅の平面構成に関する研究

第6報 近代俸給生活者家族の接客

○正会員 宮崎 信行<sup>※4</sup> 同 青木 正夫<sup>※1</sup> 同 竹下 邦和<sup>※2</sup> 同 磯貝 道義<sup>※3</sup>  
同 友清 貴和<sup>※3</sup> 同 岡 俊江<sup>※4</sup> 同 川崎 光敏<sup>※4</sup> 同 川島 浩孝<sup>※4</sup>  
同 長崎 洋子<sup>※4</sup>

### はじめに

明治以降のいわゆる近代化の中で、我が国在来の伝統的な座敷を備えた中流住宅の平面構成は、必然的に変化しつつあった。それは、大正期から昭和初期にかけて数多く見出される中廊下型平面構成となって結実した。その結実の過程は、大きく2つの過程に区別された。

一つの過程は、座敷系領域と茶の間系領域とが重なり合う、平面構成の重合化の過程である。画然と分離された領域区分から重合化した領域区分への平面構成原理の変化である。これは主として、格式的な続き間座敷の質的变化として理解できる。

もう一つの過程は、中廊下が必然的に発生し、いくつかの段階を経て中廊下型平面構成が形成される過程である。

本稿以下3編は、この2つの過程のうち前者の過程を、往生活の接客的側面からさらに考察を加え、その必然的な要因と論理を追求したものである。

まず本報では、当時の中流住宅の主な居住階層であった俸給生活者家族の接客実態を把握することを通じて、近代における続き間座敷の存在基盤を考察する。

#### 1. 対象日記記載者の概要

当時の接客実態を把握するために、ここでは2つの日記を取りあげる。一つは、寺田寅彦の日記（以下寺田日記と記す）と、もう一つは川合小梅の日記（以下川合日記と記す）である。

寺田寅彦は、周知のように戦前の有名な物理学者であり、夏目漱石に師事した文学者でもある。彼は、明治11年、高知県土族で陸軍会計監督の長男に生れている。土族の家であるため、生活上は武家の系譜に属し、他方、軍人の家でもあることは俸給生活者家族の生活環境になじんでいることも示している。彼は、妻の死別により3度結婚しているが、その間に2男2女の4人の子供が出生している。明治30年に20才で結婚してから、東京帝国大学に入学し、その教職につき、地位と生活が安定する明治42年までの間に、最初の妻に死別し再婚している。本報で取りあげた寺田日記の期間

表-1 日記記載状況

寺田寅彦日記	川合小梅日記
明治 34年(1901)24才 1月～6月、9月～12月 38年(1905)29才 1月～2月、8月～10月、12月 39年(1906)30才 1月～12月 41年(1908)31才 1月～6月、8月～10月 大正 3年(1914)37才 1月～12月 4年(1915)38才 1月～4月、6月～12月 5年(1916)39才 1月～7月、10月～12月 6年(1917)40才 1月～12月 7年(1918)41才 1月～12月 8年(1919)42才 1月～12月	明治 2年(1849)46才 8月～12月 4年(1851)48才 1月～7月 文久 4年(1864)61才 1月～12月 元治 元年(1865)62才 1月～12月 慶応 3年(1867)64才 1月～12月
「寺田寅彦全集 文学編 日記」 第11巻、第12巻 岩波書店刊、昭和12年	川合小梅著、 志賀格春・村田静子校訂 「小梅日記 一幕末・明治を紀州に生きる」 1～3、東洋文庫、平凡社刊、昭和49年

は、夫婦生活が始まっていた年が中心である。

次に川合小梅は、文化元年、紀州藩の藩校助教の長女に生まれた儒者の一人娘である。家の本禄は20石、足高をあわせて30石であった。彼女の成長後、養子を迎へ、儒者の家を継承させている。養子である夫と間には一子長男が出生している。のちに夫は藩校の学長となり、禄高も本禄50石に加増される。彼女は、藩校学長の妻として、藩の教育を側面から助け、当時としては積極的なインテリ女性であったと言われている。本報で取りあげた川合日記の期間は、彼女の息子（長男）が成人する前の一時期と、夫が藩校学長となっている時期である。

寺田日記は近代の俸給生活者家族の接客実態を把握するために、川合日記は近世末期における武家の接客実態を把握するためにとりあげた。両者の比較を通じて接客の近代化の意味並びに前述の考察をなそうとするものである。しかし、取りあげた家族生活の周期段階が多少ズレているため、その考察にはこのズレが考慮されねばならない。

両日記の記載状況は表-1に示すとおりである。

#### 2. 接客の分類

本報では、続き間座敷の存在基盤を追求するため、まず続き間座敷を必要としたであろうと考えられる接客をまず抽出した。この接客は、人生儀礼や宴会や会食などを伴う接客であり、これを儀式的接客とした。この接客では、概ね予定された行動となる場合が多く、接客そのものが一つの儀式的性格を帯びたものが多い。

従って、必ずしも来客を含まず家族のみで行われている儀式も含まれており、また、必ずしも多人数接客とは限らない場合も含まれる。

次に、日常的接客とは、こうした儀式的接客を除いたものをすべてとした。例えば、葬式の儀式に参加した接客は儀式的接客に含めたが、その葬式の手配や段取りをとるための打ち合せや訪問接客は日常的接客に分類した。

### 3. 日常的接客の近代的意味

まず図-1の寺田日記の場合を考察する。日記記載年は大正6年の1年間である。この年は、寺田寅彦にとっては、2度目の妻が病死し、医師の訪問や見舞客の訪問が多く、葬儀手配のために親族や学校関係者の来訪があいづいでいる。また住宅新築のために、設計不動産関係者がしばしば訪れている。

図-1における見舞の用件は、医師の来診や見舞客訪問などである。また、祝儀の用件は、葬儀の手配打合せが含まれる。前述の事情があるので、144件というかなり大きな接客回数となっているが、住宅新築関係接客を含めたこれらの接客回数全部合わせても53件程度である。残り91件の接客が存在するのであり、それほど少ない件数とは言えない。

寺田日記の場合、全体としての特徴は、学問談話の接客が比較的多く、また新年のあいさつや歳暮の贈り物訪問のための年中行事の接客もこれについて多いことである。前者は、寺田寅彦の個人的な影響によるものであろう。また、転職や転居のあいさつで来訪する接客も少なからずある。

ところで、こうした寺田寅彦の接客状況を、川合日記と比較すると、概ね次のような特徴が指摘できる。

まず第一には、贈答、返礼、伝言連絡のための来客が著しく減少していることである。この場合、贈答とは、歳暮の時期でもないのに、贈り物を届けるだけの来訪である。返礼は、ただ感謝の礼を述べに来るだけの訪問である。この返礼は、人の来訪を受ければその来訪を受けたことに対してさえ、その感謝のために

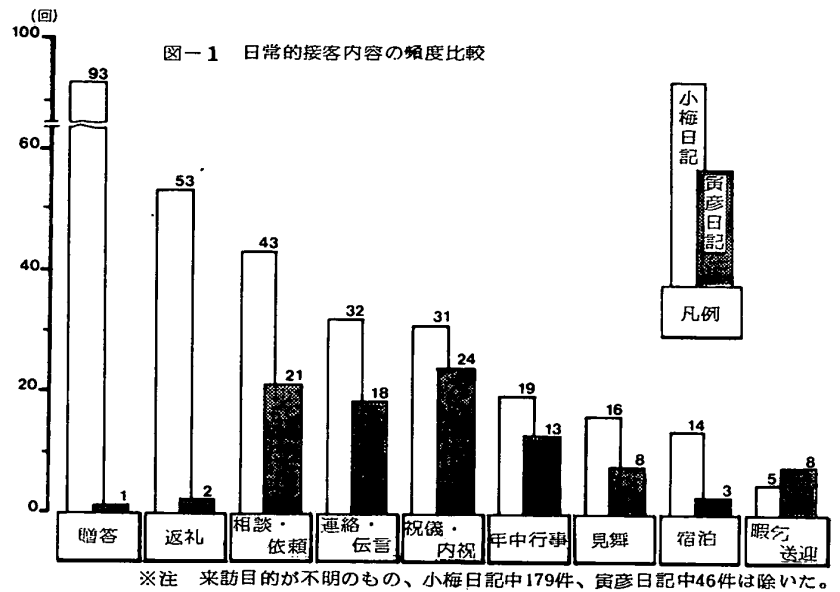
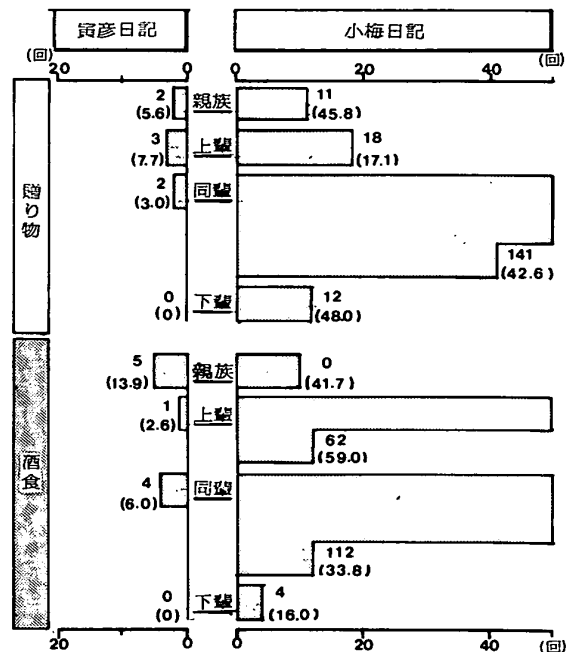


図-2 日常接客内容の頻度比較



その来客の自宅を訪問すればならないという一つの作法でもあった。伝言連絡は急な用事や招待等の連絡が他人を介してなされる場合が多かった。このような接客が寺田日記の場合にはほとんどみられない。このことは、接客内容がこうした側面を近代化してきたことを物語る。

これに対して、歓送迎会や暇合が若干ではあるが増加している。これは職場関係者の転職、転居等の歓送迎会や休暇中帰郷する際のあいさつ訪問であり、那里は離れて居住している、俸給生活者家族の接客の一つの特徴をも示している。また、学問談話の接客が多いことも、一つの新しい接客内容を示している。

ところで、接客と言え、贈り物(手みやげ)持参  
と酒食の供応が一つの慣習であった。この点も比較し  
てみたのが、図-2である。この図では、贈り物を持  
参した来客数のみを示している。一見して明らかなよ  
うに、寺田日記の場合は著しい減少を示している。川  
合日記の記載時期が寺田日記の場合より家族生活の周  
期段階が遅く、それだけ人間関係が広がっているとい  
う事情や、他方では寺田日記の記載時期が妻の病気  
及び死亡という時期でそれだけ交際事情が低下してい  
る点が考慮されねばならないが、それにしても俸給生  
活者家族の接客においては前時代より簡素化されて  
いることは容易に察せられる。この日常的接客の簡素  
化ということも接客の近代化として大きな特徴をど  
つと云える。

このように、俸給生活者家族における接客は、全体  
として減少しながら、無駄や不経済な接客内容を除去  
しつつ、個人的な内容の強い接客へと推移しつつあ  
ったことがわかる。それは、彼らの生活が、郷里から離  
れていくため、その人間関係が限定されていくことや、  
彼らの世帯構成が一般には夫婦と子供という核家族で  
あり、家のしきたりや慣習から相対的に自由な立場に  
置かれていたためであろう。そして、それらの条件が  
一層、そうした推移を促進したであろう。

#### 4. 儀式的接客の近代的意味

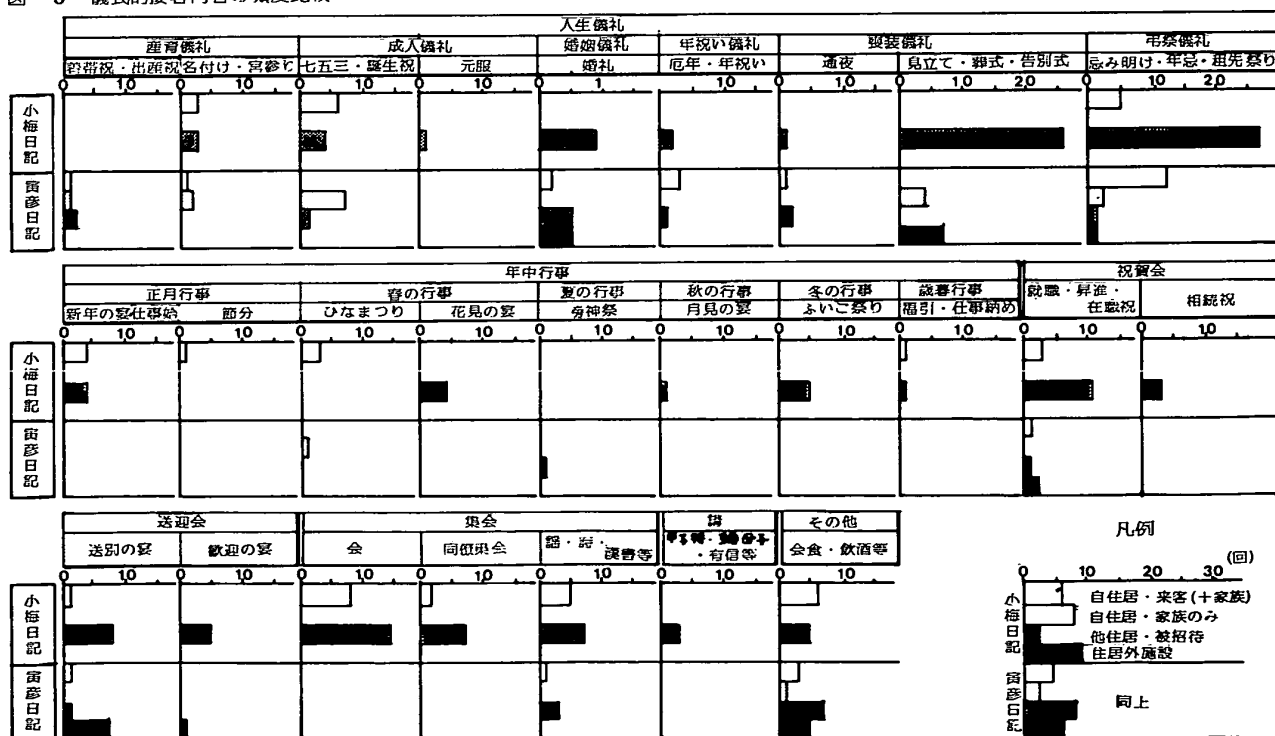
前述したように儀式的接客とは、接客そのものが一  
つの儀式を成立させるために意識的に行われるもので  
あり、招待もしくはあるかじり規定された行動となる  
場合が多い。先の内容を大別すると、図-3のようにな  
る。尚、ここでは、住宅内での儀式的接客の内容を  
できるだけ全体的に把握したいため、自宅だけの接客  
に限らず、他家に招待された場合をも含めた。

まず寺田日記の場合をみると、人生儀礼がその大半  
を占めている。ついで多いのが、その他の儀式的接客  
である。このその他とは、夕食に招いたり招かれたり  
という会食や、新年祝いなどであり、飲酒を伴って  
いる。

歓送迎会は、前述した日常的接客の送迎・暇乞と異  
なり、ここでは酒食を伴う宴会である。年中行事は、  
わずかに2回であり、新年宴会と花見の宴とにわか  
てはれない。年中行事が少ないことは、やはり都市居  
住者の接客の一つの特徴を示している。従って、俸給  
生活者家族の儀式的接客は、人生儀礼を中心に、他は  
職場関係の会食や歓送迎会等に限定されていることがわ  
かる。

このような全体的な傾向を把握した上で、川合日記  
と比較すると、その接客内容の推移は概ね次のように

図-3 儀式的接客内容の頻度比較



指摘できよう。

すなわち、第一に、接客内容からみると、日常接客の場合とは異なり、著しい減少を示している接客が比較的少ないことである。著しい減少を示しているのは、集会における会並びに同僚集会である。集会の中の会は同僚集会と各種の会との区別がつかないためにそうしているが、概ね頻度や人数からみて同僚集会と思われる。

もし、会を同僚集会とすれば、年に平均4回程度ひらかれていたことになる。江戸時代においては、住宅が、こうした同僚集会の場となっていたことがうかがえるのである。また、講や祝賀会、相続祝いがみられなくなっている点も含めて、ここにも接客の内容が近代化されていくことがわかる。

第二に、自家と他家との区別にかかわらず、住宅内での接客が全体として減少している中で、住宅外での接客が増大している点である。すなわち、これまで住宅の中を行っていた儀式的接客のいくつかが社会化されていく点である。それは、例えば送迎会に顕著にある。川合日記の場合には15回のいづれも住宅内で送迎会が行われていたが、寺田日記の場合には、10回のうち8回は料理屋が利用され、住宅外の施設が利用されているのである。このように社会的施設に転移している儀式的接客は、他には、人生儀礼の中の婚礼と葬儀にもみられる。その他の外食・会食も住宅外で行われている。

婚礼では、結婚式・披露宴等が神社や会館が利用されている。また葬儀では葬式が神社や斎場で行われている。

このように、儀式的接客のうちのいくつかが社会的な施設に転移しつつある点など、接客の近代化がよくあるわけていえるといえよう。

しかし、第三には、この傾向に反するかのように葬儀の中での弔問儀礼、つまり法要・法事は、一見増えたと増加したように見える。これは寺田重彦の場合、2度も妻に死別しているため、結果的に増加しただけであるが、それらの多くが住宅外で行われているのである。こうした法要・法事の場合、人数が記載されていないのが残念である。

また産育儀礼や成人儀礼と必ずしも住宅外に出ている。このように、儀式的接客の場合、婚礼や葬式な

どのように社会化されるものがあるとき、既述は内容によって異なり、社会化されないものもあることを教えている。その社会化されない、自宅内で行われる儀式的接客は、主として法事や産育・成人儀礼である。とりわけ、法事による儀式的接客が、近代における続き間座敷の一つの存在基盤であることがわかる。4. 終わりに

寺田日記をみていくと、職場関係者や友人・知人の他に、血族や姻族などの親族がしばしば訪問している。それは、儀式的接客の場合だけでなく、またそれに関連した日常的接客でもなく、普通の日にしばしば訪問していることがある。

最初の妻が死亡してのちも、その妻方の家の父母が寺田家に訪問し、宿泊したりしている。それは法事をはじめとして、日常的な接客、あるいは2度目の妻の葬式にも参列したりなどしているのである。

このような親族のつながりは、彼の姉の家族においても同様である。姉の子供が遊びに来たり、もちろん姉自身が遊びに来たりなどしている。

寺田重彦の親族をめぐるときあいは長く続けるが、その場合、やはり法事が一つの軸になっているかに思われる。

明治期には2回の先祖祭り1回の5年忌があり、先祖祭りは、そのための帰郷している。さらに大正3年には1周忌、翌4年には三周忌と四十年忌、さらに大正5年には先祖祭りを今度は自宅で行なっている。

このように、寺田重彦の場合は、彼が長男で嫡子の立場にあつたため、先祖祭りをひらくことになつていすが、物理学者で科学的な思考をもっていたと思われる寺田重彦の家庭において、すでにみえたような親族関係あるいは家関係が維持されている点は注目される。

このことは、一方では彼がえうせざるを得ないほど社会的な力に縛られていたとみることも可能である。しかし、他方では、家関係あるいは親族関係だからこそ、最も身近な感情を寄せた親睦的な個人的な感情を維持する、つながりを持続するという見方も可能である。あるいは、生活保障がさめて貧困な社会条件のもとでは、個々の世帯の独立した生活を守る最後の寄り所として家関係のつながりを持続させ、相互のつながりを強化して扶助し合うという見方も可能である。続き間座敷の存在はこうした家関係とも関連がある。